

高 畑 遺 跡

—第 16 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 934 集

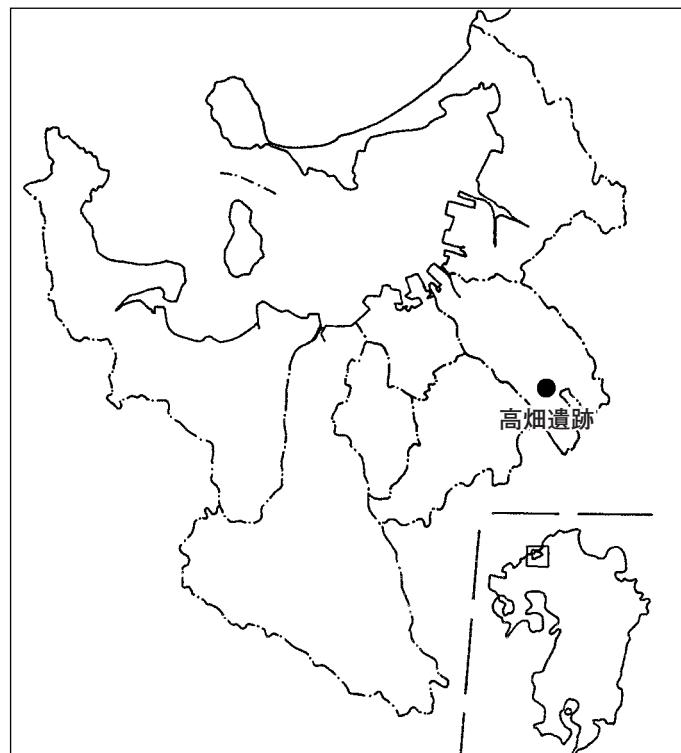
2 0 0 7

福岡市教育委員会

TAKA BATAKE
高 畑 遺 跡

— 第 16 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 934 集



遺跡略号 TKB-16

調査番号 9774

2 0 0 7

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、個人専用住宅建設に伴い調査を実施した高畠遺跡第16次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、古墳時代の溝を確認すると共に、当時の土器や木製品等が出土しました。これらは当時の高畠地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、地権者をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が個人専用住宅の建設に伴い、福岡市博多区板付6丁目2番23において発掘調査を実施した高畠遺跡第16次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、国庫補助事業として実施した。
3. 報告する調査の細目は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、阿部泰之、犬丸陽子が行った。
6. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、阿部、榎本が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
9. 遺構の呼称は、溝をSDと略号化した。
10. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	高畠遺跡	調査次数	16次	遺跡略号	TKB-16
調査番号	9774	分布地図幅名	板付24	遺跡登録番号	020095
開発面積	198.35 m ²	調査対象面積	100 m ²	調査面積	70 m ²
調査地	福岡市博多区板付6丁目2番23				
調査期間	平成10(1998)年3月9日～3月31日				

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の立地と環境	2
1.	高畠遺跡と周辺の遺跡	2
2.	高畠遺跡のこれまでの調査	2
III.	調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	遺構と遺物	7
1)溝(SD)		7
IV.	結語	12

挿図目次

第1図	高畠遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図	高畠遺跡調査区位置図(1/4,000)	4
第3図	16次調査区位置図(1/1,000)	5
第4図	16次調査区全体図および北壁土層実測図(1/50)	6
第5図	SD01上層出土土器実測図(1/4、1/6)	8
第6図	SD01中層出土土器実測図(1/4)	9
第7図	SD01下層出土土器実測図(1/4)	10
第8図	SD01出土木製品実測図(1)(1/6、1/8)	11
第9図	SD01出土木製品実測図(2)(1/8)	12

表目次

第1表	高畠遺跡調査一覧表	4
-----	-----------	---

図版目次

図版1	(1)16次調査区全景(東から) (2)16次調査区北壁土層(南から)
図版2	(1)SD01 器台、鉄斧柄出土状況(東から) (2)SD01 泥除け具出土状況(北から) (3)SD01 ねずみ返し出土状況(南から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成10(1998)年2月3日付で、長沼博行氏より福岡市教育委員会宛てに福岡市博多区板付6丁目2番23(面積:198.35m²)における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号:9-2-493)。

これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である高畠遺跡に含まれていることから2月12日に試掘調査を実施し、申請地の東側で溝を確認した。その後、この試掘調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、建築工事に伴い地下遺構の破壊が回避できないことから、遺構を確認した申請地東側の約100m²を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

また、発掘調査は、個人専用住宅建設に伴うものであることから、国庫補助事業とし、3月より着手することになった。

なお、整理・報告書作成も国庫補助事業とし、平成18(2006)年度に実施した。

2. 調査の組織

調査委託:長沼博行

調査主体:福岡市教育委員会 文化財部 埋蔵文化財課(現 埋蔵文化財第1課)

調査総括:埋蔵文化財課長 荒巻輝勝(調査) 埋蔵文化財第1課長 山口譲治(整理)

同課第2係長 山口譲治(調査) 同課調査係長 山崎龍雄(整理)

調査庶務:同課第1係 河野淳美(調査) 文化財管理課管理係 鈴木由喜(整理)

事前審査:同課主任文化財主事 松村道博(試掘)

同課第2係 屋山洋(試掘)

調査担当:同課第2係 榎本義嗣(現 埋蔵文化財第1課調査係)

調査作業:金子國雄 熊本義徳 坂田武 渋谷博之 関哲也 石橋テル子 金子澄子 唐島栄子

酒井康恵 杉村百合子 辻美佐江 永松伊都子 永松トミ子

整理作業:西島信枝 松尾真澄

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで長沼博行氏をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

1. 高畠遺跡と周辺の遺跡

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する高畠遺跡は、このうち福岡平野に位置する。同平野の西側には背振山系に属する油山(標高：597m)から北側に発達する丘陵が派生し、早良平野と画される。また、東側には三郡山地より派生した大城山(標高：410m)の山麓から北西方向に月隈丘陵が延びて、粕屋平野との境界をなしている。また、平野内には御笠川、那珂川が博多湾へと北流し、沖積地が形成されるが、Aso-4火碎流堆積による洪積台地も点在している。本遺跡は、御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた洪積台地およびその東側に広がる沖積地上に展開している。

次に本遺跡周辺の主な遺跡を概観しておく。この両河川間の洪積台地は鞍部で画されながら南北方向に延びており、本遺跡の南東側には麦野A遺跡が立地する。同遺跡は竪穴住居を主体とする古代集落を代表とするが、柵列や溝、門等で構成される官衙的な遺構の検出例があり、今後注目される。また、本遺跡の北西側には、初期の水稻農耕集落として著名な板付遺跡が所在する。初期水田や弥生時代初頭の環濠集落については、国史跡として指定がなされ、保存活用が図られている。また、同遺跡の北側の御笠川と諸岡川が合流する沖積低地には、那珂君休遺跡が立地している。古墳時代から中世にかけての水田が確認され、該期の水田区画や灌漑施設を理解する上で、貴重な資料となっている。また、同様の沖積地に立地する遺跡としては、本遺跡の南東側微高地に広がる井相田C遺跡があり、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群や多数の墨書き木札類が出土した室町時代の溜井等が検出されると同時に、中世における水田化も確認されている。複数の旧河道とその間の微高地における土地利用が解明されつつある。

また、これら遺跡群西側の那珂川東岸にも洪積丘陵が延びており、弥生時代から連綿と継続する那珂遺跡や比恵遺跡等が展開している。

2. 高畠遺跡のこれまでの調査

本遺跡ではこれまでに19次にわたる調査が行われている(第2図、第1表参照)。先に述べたとおり、本遺跡は洪積台地と東側沖積地から構成されているが、台地上の調査例は少なく、第11・18・19次の3調査区のみである。このうち、18次調査では面的な調査が実施され、台地中央部は近代に大きく削平され、遺構は遺存していないものの、その東西両縁部では、弥生時代から古墳時代の集落が展開することが判明した。また、台地西側では、切り通しによって設けられた官道(水城東門ルート)が地鎮遺構や路盤整地を伴い良好な状態で確認された。また、台地の東側には8世紀代の古代寺院(高畠廃寺)を想定する考えがあるが、この官道の北側延長部にあたり、再考の余地があろう。なお、この想定に及んだ出土遺物の内容から、官衙(那珂郡衙)とする意見も新たに提案されている。

これらの調査例を除くと、本遺跡の調査は、台地縁辺や沖積地の調査が大半を占める。本報告の第16次調査を含む東側沖積地は調査例が比較的多く、主要遺構として古墳時代と古代の溝が確認されている。前者は、南側より第10次、15次、16次、12次に延長するもので、後者は、第2次、17次、9次、8次、10次に続く。なお、両者は第10次調査区で重複関係にあり、この地点で後者の溝は直角に折れ、東に向きを変えている。なお、第8次、17次調査では、人面墨書き土器や斎串、絵馬等の木製祭祀遺物が出土しており、律令的な祭祀を伺わせる。



- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|---------|
| 1 高畠遺跡 | 2 麦野 A 遺跡 | 3 麦野 B 遺跡 | 4 麦野 C 遺跡 | 5 南八幡遺跡 |
| 6 板付遺跡 | 7 那珂君休遺跡 | 8 井相田 C 遺跡 | 9 井相田 D 遺跡 | 10 仲島遺跡 |
| 11 立花寺 B 遺跡 | 12 下月隈 C 遺跡 | 13 雀居遺跡 | 14 須玖遺跡群 | 15 三筑遺跡 |
| 16 諸岡 A 遺跡 | 17 諸岡 B 遺跡 | 18 井尻 B 遺跡 | 19 五十川遺跡 | 20 那珂遺跡 |
| 21 比恵遺跡 | | | | |

第1図 高畠遺跡位置図(1/25,000)



第2図 高畠遺跡調査区位置図(1/4,000)

次数	調査番号	調査面積(m ²)	主な検出遺構	報文
1	7312	48	旧河川	市報第29集
2	7313	72	溝(奈良時代)	市報第29集
3	7509	400	土坑、杭列	市報第36集
4	7933	370	溝(古墳時代、奈良時代) 遺構なし	市報第57集 —
5	—		遺構なし	—
6	—		遺構なし	—
7	8138	180	溝(古墳時代、奈良時代)	市報第83集
8	8220	330	溝(奈良時代)、水田(中世)	市報第98集
9	8221	94	溝(奈良時代)	市報第98集
10	8436	1,560	溝(古墳時代、奈良時代)	市報第115集
11	8441	550	竪穴住居・貯蔵穴・井戸(弥生時代、古墳時代)	市報第115集
12	8649	600	溝(弥生時代、古墳時代)	市報第210集
13	8702	480	井戸・土坑(弥生時代、古墳時代)	年報vol. 2
14	9368	593	溝(奈良時代)	市報第458集
15	9753	254	溝(古墳時代)	年報vol. 12
16	9774	70	溝(古墳時代)	市報第934集
17	9833	2,063	溝(奈良時代)	市報第676集
18	9936	4,750	竪穴住居・井戸(弥生時代、古墳時代)、官道	市報第699集
19	0261	204	竪穴住居・井戸(古墳時代)	市報第799集

第1表 高畠遺跡調査一覧表

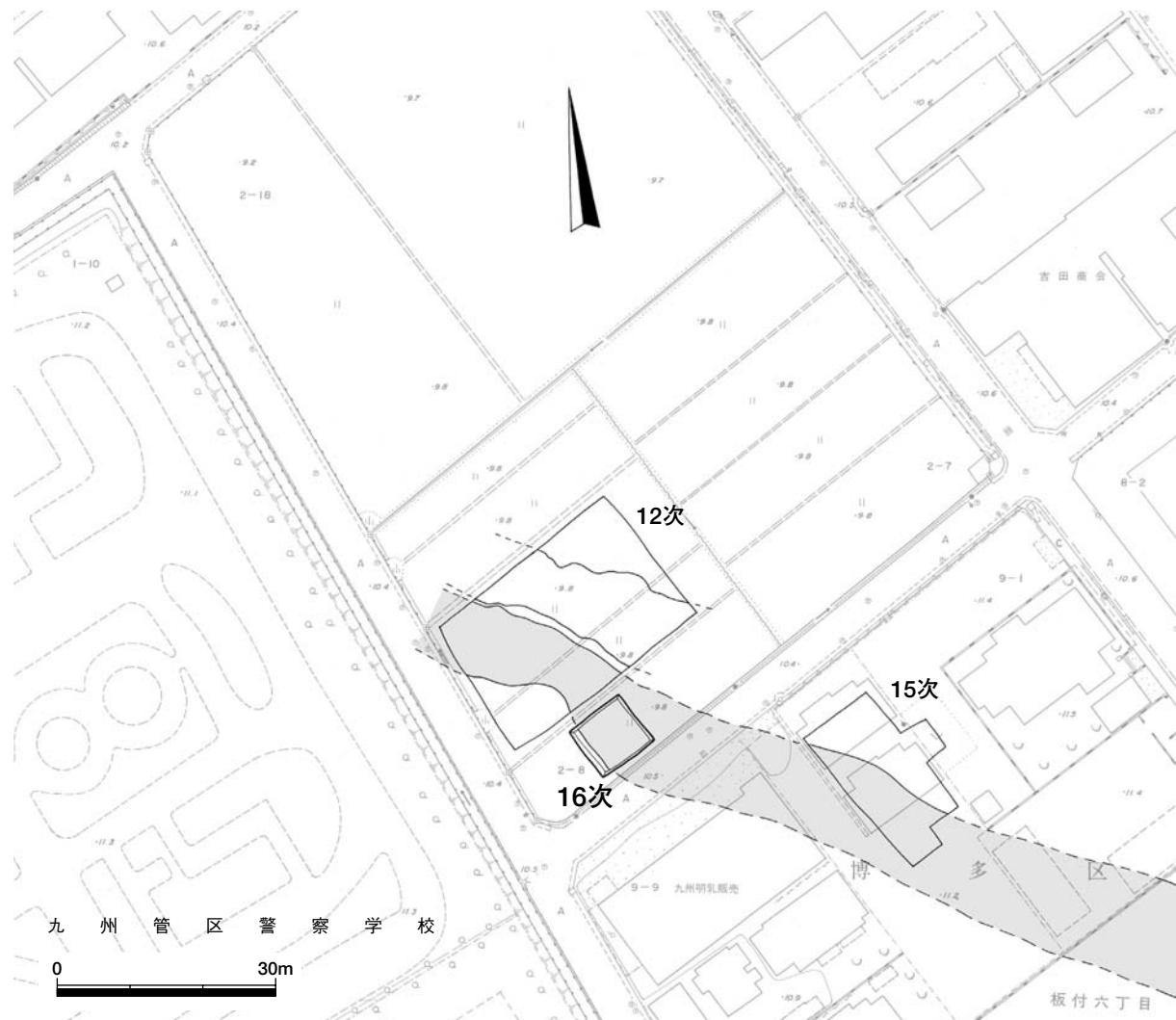
III. 調査の記録

1. 調査の概要

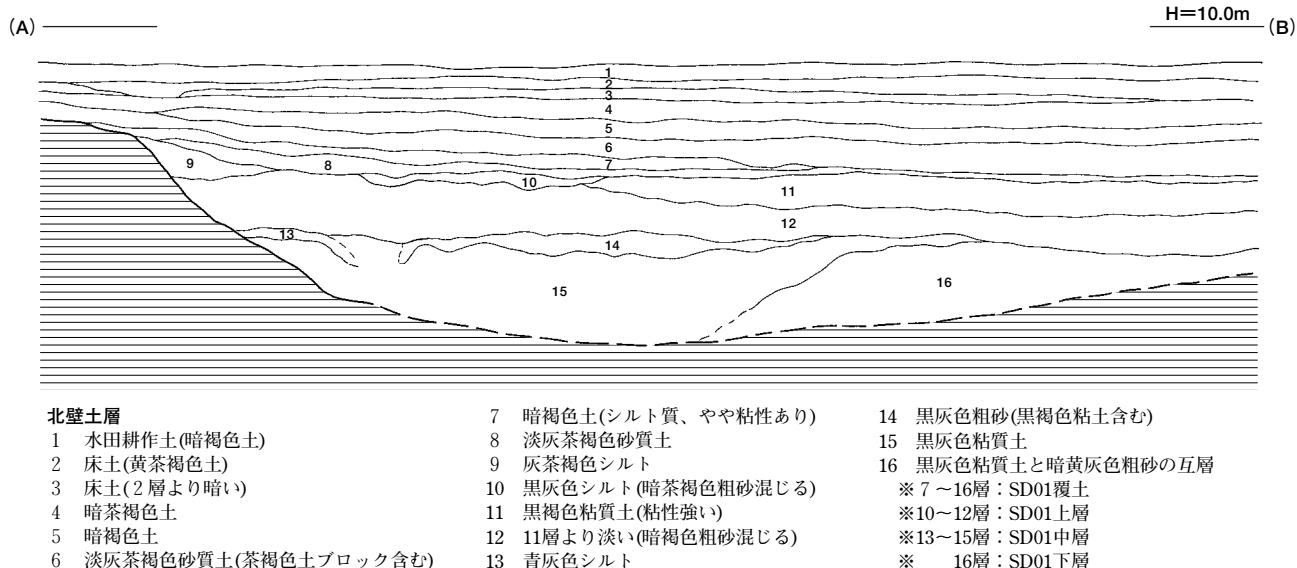
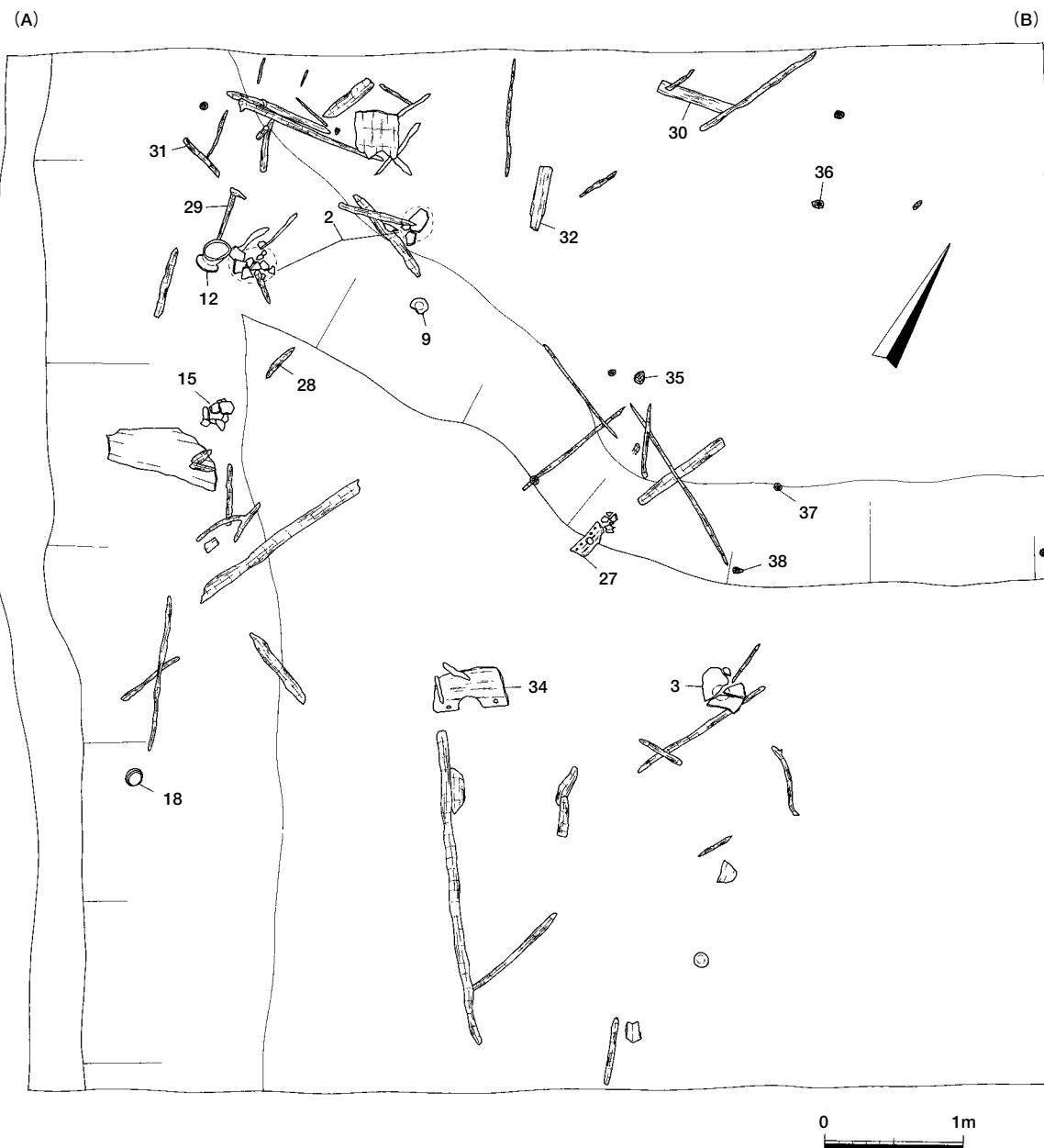
今回報告する第16次調査区は、博多区板付6丁目2番23に所在し、高畠遺跡の東側沖積地内の中央やや北側に位置する。調査前の状況は標高約9.8mを測る休耕田であった。なお、本調査区の北側隣接地では、第12次調査(調査番号：8649)、南側の道路を隔てた南東側では、第15次調査(調査番号：9753)が実施されている。

調査区の層序(第4図 土層図参照)は、上層から水田耕作土(1層)、床土(2・3層)および4～6層の堆積層となり、今回遺構を検出した黄灰色シルト層に至る。この面の標高は、9.4mを測る。この下層にも細砂や粗砂等の水性堆積物が認められるが、これらは弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路の埋没層で、隣接する12次調査区で3号溝として調査が行われている。なお、今回検出した遺構は、この黄灰色シルト層から掘り込まれる古墳時代前期の溝1条(SD01)で、第12次調査の1号溝、第15次調査の溝と一連のものと考えられる(第3図参照)。

発掘調査は、平成10(1998)年3月9日、重機による表土剥ぎ取りから着手し、翌日、発掘器材を搬入した。12日より壁面清掃や遺構検出等の人力作業を開始し、検出した溝の掘り下げや、遺物の取り



第3図 16次調査区位置図(1/1,000)



第4図 16次調査区全体図および北壁土層実測図(1/50)

上げ、写真撮影、図化等の作業を進めた。全作業が終了した30日に重機によって埋め戻しを行い、同月31日に器材撤収をもって調査を終了した。なお、調査対象面積は、「I.-1.調査に至る経緯」で前述した様に申請面積198.35m²のうち、遺構を確認した東側約100m²であったが、周囲の安全対策上、実際の調査面積は70m²であった。

2. 遺構と遺物

1) 溝(SD)

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代前期の溝1条(SD01)のみである。

SD01(第4図)

調査区の大半を占める南北方向の溝で、西側の肩を検出した。また、北側は溜まり状に深さ約0.2m程度落ち込んでいる。先述したとおり、このSD01は、北側に隣接する第12次調査1号溝の南側延長にあたる。同調査区の南側では、東西の両肩部が確認されており、その溝幅は約8mであること、両者の位置関係から、本調査区外の東約1mに東側の肩が位置するものと推定される。なお、12次調査の1号溝は、台地東側端部の形状に沿うように北西方向に屈折し、更に延長している。

7層以下がSD01の覆土であるが、7～9層までは重機によるすき取りを行ったため、10層以下を人力によって掘り下げた。覆土の土質や色調によって、大きく3層群(上・中・下層)に分層し、遺物の取り上げを行った。以下の出土遺物の報告においても、この層群に基づくが、現場でのラベル注記は順に1・2・3層となっていることを付記しておく。

まず、10～12層の黒灰色シルト～黒褐色粘質土を上層とした。主体は、11・12層の黒褐色粘質土で、12層には暗褐色粗砂を含む。厚さは約0.4mを測る。また、この層群は、平面的には溝の北東側に広がっており、土器や木製品、自然木が出土した。なお、SD01上層は、12次調査1号溝上層に相当し、前者の11・12層が、後者の6層に該当するものと考えられる。1号溝上層では、溝中央部に集中した遺物群の出土が認められ、本調査区では北端部にその傾向が伺えるものの、全体的に散在しており、密度も薄い。

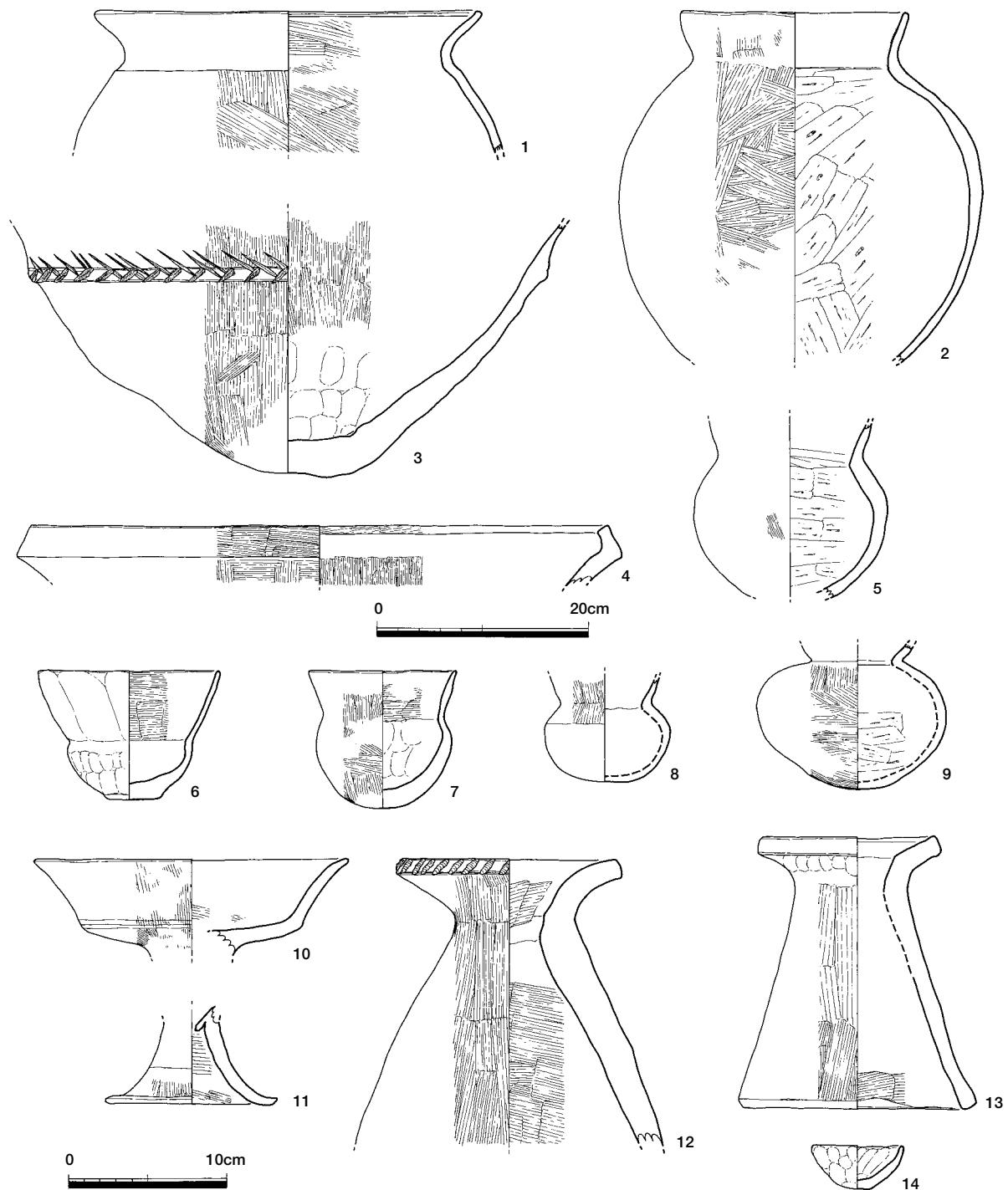
次に13～15層を中層とした。この層群は、上層との間に薄い黒灰色粗砂(14層)を挟み、黒灰色粘質を呈する15層を主体とするものであるが、15層の下位については、湧水が著しく層界を確認し得なかった。12次調査1号溝との土層照合によれば、その厚さは約0.7mで、溝底に至るものと推測される。また、この層群は、平面的には溝中央部に堆積するが、上層に比して遺物量が少なく、少量の土器、木製品の他、自然木が出土した。なお、SD01中層は、12次調査1号溝下層に相当し、前者の15層が、後者の23層上層部分に該当するものと考えられるが、12次調査で上下層の間層となる茶灰色粗砂(7層～無遺物層)は今回の調査区では、確認できていない。

下層とした層は、黒灰色粘質土と暗黄灰色粗砂が互層となる16層であるが、15層同様に、著しい湧水のため、下位の層界を確認できていない。12次調査1号溝との土層照合によれば、東側に向かって緩く立ち上がり、肩に至るものと推測される。この層は、平面的には、溝の西端部を除き、最下層に広く堆積が認められたが、土器と自然木が少量出土したにとどまる。なお、SD01下層は、12次調査1号溝下層に相当し、前者の16層が、後者の23層下層部分に該当するものと考えられる。

以上から、SD01は、幅約8m、深さ北側で1.4m、南側で1.1mと推定される。

出土遺物(第5図～第9図)

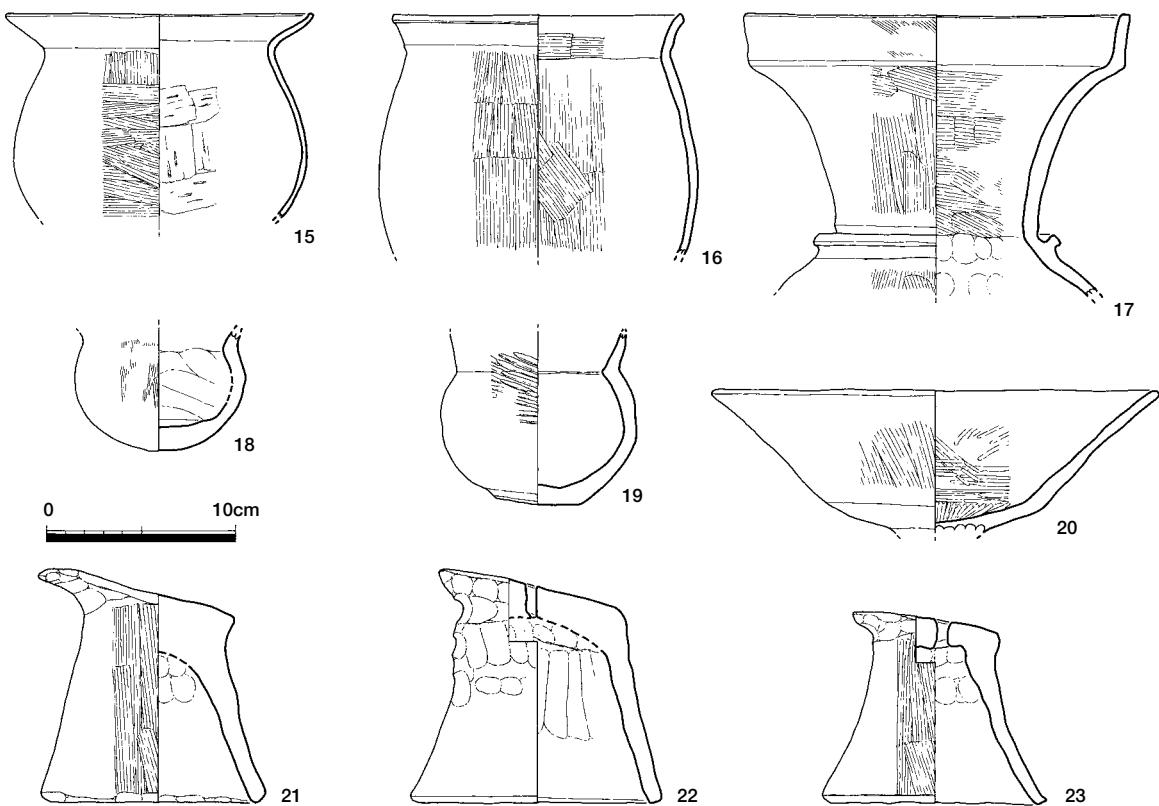
以下の遺物報告にあたって、土器については層別に記述するが、木製品は取りまとめて後述し、その中で出土層位を記載している。



第5図 SD01 上層出土土器実測図(4は1/6、他は1/4)

上層出土土器(第5図)

1～3は甕である。1の口縁端部は緩く摘み上げ、内面には横もしくは斜め方向の刷毛目調整、外面は口縁部がヨコナデ、胴部は刷毛目を施す。頸部外面の調整の境界部には鈍い段が認められる。2は球形の胴部に僅かに内湾して立ち上がる口縁部が付く。外面は不定方向の刷毛目、内面はヘラ削りを施す。下半部の器面には凹凸が認められる。3は大形の甕で、丸底の底部には僅かに面を残す。外

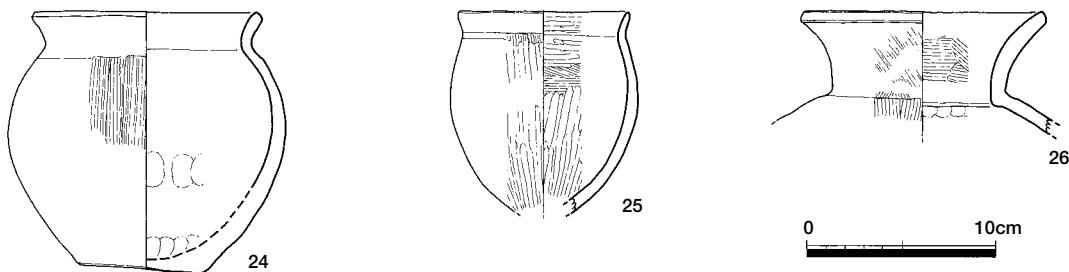


第6図 SD01 中層出土土器実測図(1 / 4)

面には扁平な突帯を貼付し、板状工具の木口により羽状文を施すが、文様の上部は突帯の上位に及ぶ。内外面に刷毛目調整を行うが、外底部にはナデを加える。4～9は壺である。4は復元口径55.6cmを測る複合口縁壺で、口縁上部内面にヨコナデを加える他は、刷毛目調整を行う。5は球形の胴部に外開きの口縁部が立ち上がる。胴部内面には横方向のヘラ削りを加える。やや厚手の器壁である。6～9は小形丸底壺である。6は低い扁球形の胴部にレンズ底状の平底が付くもので、しまりのない頸部から大きく開く口縁部を有する。口縁部内面には細かい刷毛目を施す。器壁は薄く仕上げる。7は球形の胴部から口縁部が立ち上がる。頸部外面の稜は鈍い。胴部内面には指オサエを施すが、他は刷毛目調整を行う。8は胴部の上半に鈍い稜線が認められ、その上位には刷毛目を施す。頸部の内外面には稜を有する。底部は僅かながら面が認められる。9は扁球形の胴部を呈し、頸部はしまる。外面は刷毛目、内面にはヘラ削りを施す。10・11は高坏である。10は深みのある坏部で、屈曲部の稜は鈍く、丸みを呈する。器面が風化するが、内外面に刷毛目が認められる。11は裾が開く脚部で、内面はヘラ削りを施す。12・13は器台で、上位に屈曲部がある。12の脚部は外湾気味のカーブを描き、口唇部には板状工具の木口による施文を有する。内外面共に細かい刷毛目調整を行う。厚手の器壁である。13は受部の端部を尖り気味に収める。脚部外面は刷毛目、内面は下端を除き、丁寧にナデを施す。14は手捏ねの丸底鉢で、指オサエが顕著である。

中層出土土器(第6図)

15・16は甕である。15は扁球状の胴部に強く外反する口縁部が付き、その端部を摘み出す。胴部の上位には縦方向の刷毛目、以下には横方向の刷毛目を施す。内面はヘラ削りを行う。16は「く」字状



第7図 SD01下層出土土器実測図(1/4)

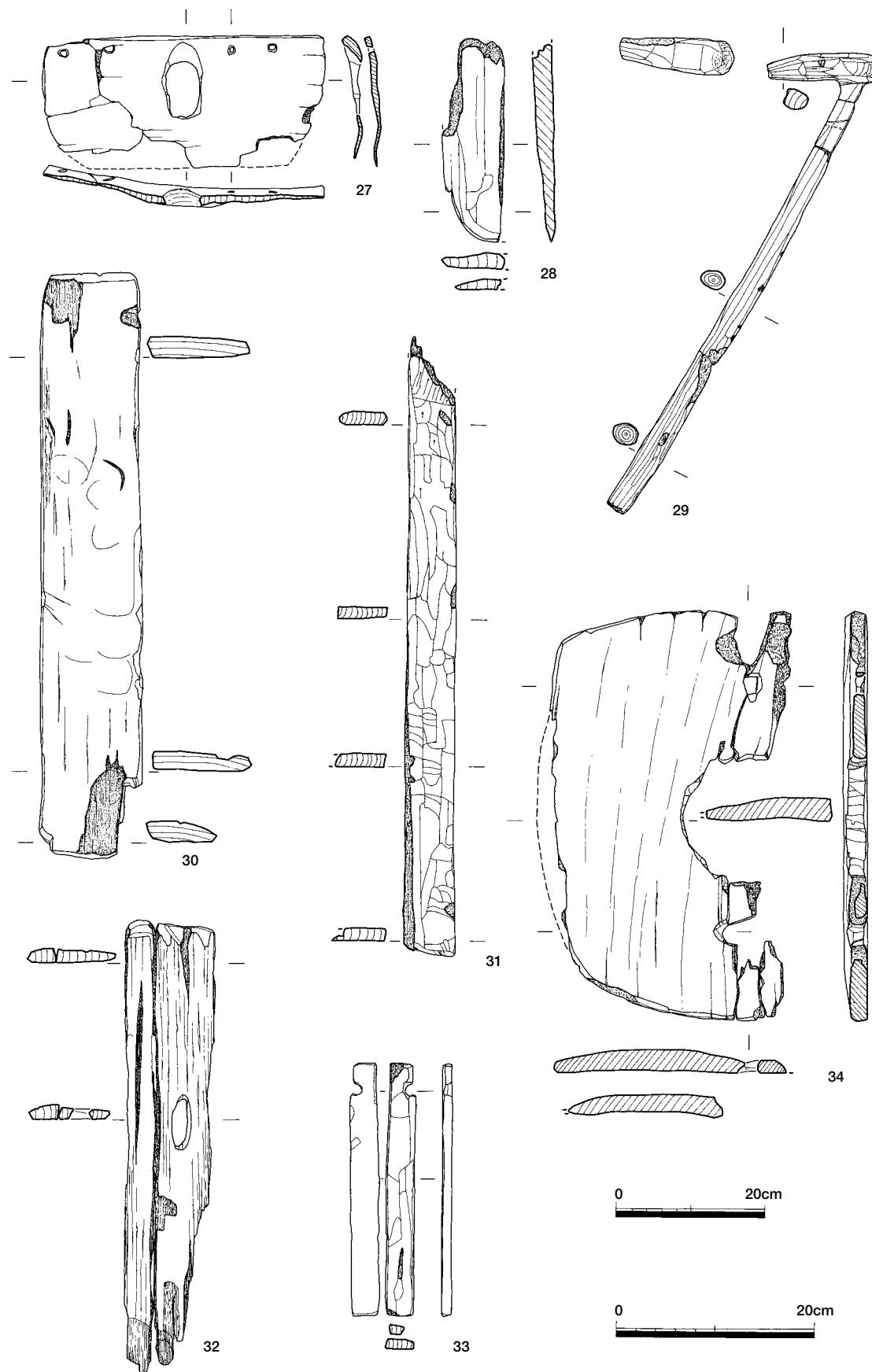
の口縁部を呈するものであるが、稜は鈍い。口縁端部は丸みをもつ。内外面に刷毛目調整を行う。17～19は壺である。17は複合口縁壺で、直立気味に僅かに外反する口縁部を有する。頸部に向かってすぼまり、断面「コ」字形の突帯を巡らせる。口縁部はヨコナデ、頸部は内外面に刷毛目を施す。18・19は小形丸底壺で、18の外面は刷毛目、内面には指ナデを行う。19はレンズ底状の底部を有し、胴部上半から頸部にかけて叩きを施す。胴部内面には粗い指ナデが残る。20は高壊の壊部で、屈曲部の稜は鈍い。器面は風化するが、内面にはヘラ研磨が残る。21～23は沓形支脚で、いずれも頂部にはナデ調整を施す。また、22・23には焼成前の穿孔を有する。21は外面および内面下半に刷毛目、上半には指オサエを残す。22は指オサエや指ナデによる器面の凹凸が認められる。23の外面は刷毛目調整、内面は指ナデで仕上げる。

下層出土土器(第7図)

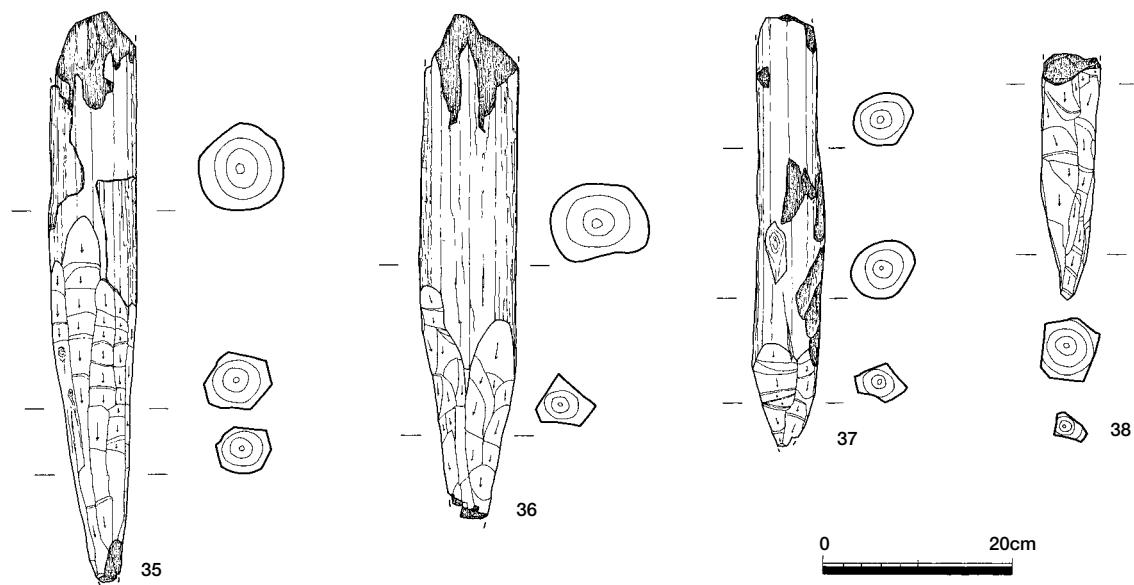
37・38は「く」字状の口縁部を呈する甕である。37は平底の底部に張りのある胴部が付く。器面の風化が進むが、外面には刷毛目が部分的に残る。内面はナデ調整を施す。38は立ち上がり気味の口縁部を有し、胴部に張りがない。内外面共にヘラ研磨が認められる。39は壺である。外面および口縁部内面には刷毛目、胴部内面には指オサエが残る。

木製品(第8図・第9図)

27は上層出土の泥除け具(図版2-(2))で、カシの柾目取り材を用材とする。長辺端部には4箇所の小孔を有する。28は厚さ2.0cmを測る鍔もしくは鋤の刃部片で、カシの柾目取り材を用いている。上層出土である。29は枝分かれ部を用いた鉄斧柄(図版2-(1))で、長さ54.0cm、台部長11.6cm、台部幅3.7cmを測る。上層出土である。30～33は加工板材で、30・32が上層、他は中層出土である。30は板目取り材を用材とし、長さ59.3cm、幅10.0cm、厚さ2.1cmを測る。樹種は不明である。31はスギの柾目取り材で、折損している。残存長63.6cm、幅5.1cm、厚さ1.4cmである。32はスギと考えられる柾目取り材を用材とするもので、端部が炭化している。33もスギの柾目取り材を用いた細い板材で、長さ26.1cm、幅2.9cm、厚さ1.0cmを測る。34は中層出土のねずみ返し(図版2-(3))で、約1/3が折損している。柱孔の幅は約16cm前後で、両側に径約2cmの小孔が認められる。長さ55.1cm、厚さ3.0cmを測る。木取りは不明である。35～38は帰属層位不明の杭先端部で、溝のほぼ中央部で出土した。いずれも芯持ち材である。



第8図 SD01出土木製品実測図(1)(34は1/8、他は1/6)



第9図 SD01出土木製品実測図(2)(1/8)

IV. 結 語

今回検出したSD01から出土した土器は、弥生時代後期前半から古墳時代前期(布留式新段階)に至っている。同遺構が弥生時代後期に始まり、布留式古段階に埋没したと考えられる自然流路(12次調査3号溝)上に掘削されており、遺物が混在したものと想定される。先にも述べたが、SD01は12次調査1号溝の南側延長部に相当する。同溝の調査では、多数の土器が出土しており、下層(SD01中層・下層に相当)は布留式新段階、上層からは陶邑I型式段階の須恵器が出土している。よって、SD01の掘削時期も同様に布留式新段階と考えるべきで、第5図2の不定方向の刷毛目を施す甕や刷毛目調整を施す同図7~9の小形丸底壺が該期に相当しよう。

また、SD01の南側延長部分については、第15次調査でその一部が確認されており、更に南側では10次調査のSD26に連続することが推定されている。この溝は、これら調査区の西側を舌状に延びる洪積台地の東縁辺に沿うものであり、周辺沖積地における水田経営にあたっての主要水路であったことが予測される。また、台地上では第18・19次調査が実施され、古墳時代中期に集落遺構が増加することが確認されていることからも、集落と水田開発の有機的な関連性も指摘できよう。

図 版



作業風景

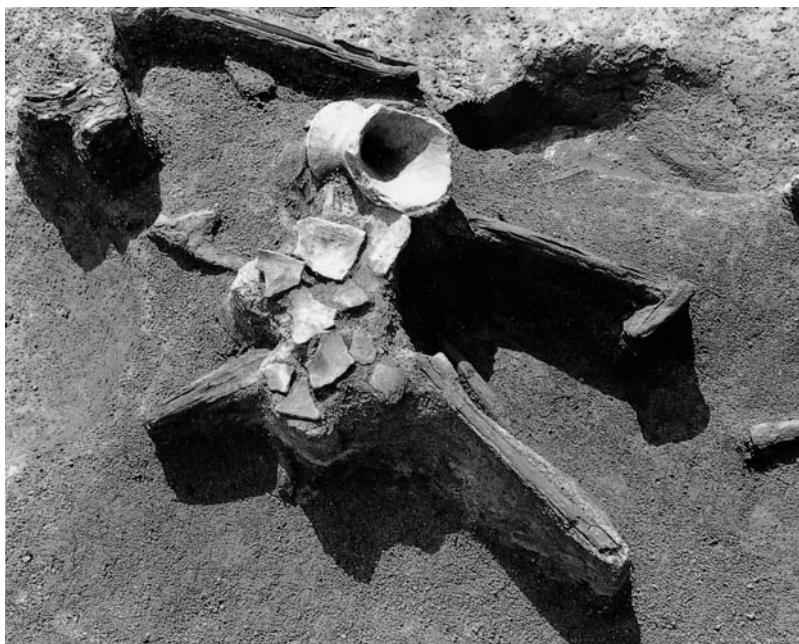


(1) 16次調査区全景(東から)



(2) 16次調査区北壁土層(南から)

図版 2



(1) SD01 器台、鉄斧柄出土状況(東から)



(2) SD01 泥除け具出土状況(北から)



(3) SD01 ねずみ返し出土状況(南から)

報告書抄録

ふりがな	たかばたけいせき							
書名	高畠遺跡							
副書名	第16次調査報告							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第934集							
編著者名	榎本義嗣							
編集機関	福岡市教育委員会							
発行機関	福岡市教育委員会							
発行年月日	2007年3月30日							
郵便番号	810-8621							
住所	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
電話番号	092-711-4667							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たかばたけいせき 高畠遺跡 第16次	ふくおかんふくおかし 福岡県福岡市 博多区板付6丁目 2番23	40132	0095	33° 33' 40"	130° 27' 23"	19980309 ～ 19980331	70	個人専用 住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高畠遺跡 第16次	生産	古墳	溝 1	土師器 弥生土器 木製品	第12次調査および第15次調査で確認されていた布留式新段階の溝の延長部を検出した。水田經營に関わる主要水路と考えられる。			

たかばたけ 高畠遺跡

—第16次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第934集

2007(平成19)年3月30日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092)711-4667

印刷 文化印刷株式会社
北九州市小倉北区井堀3丁目18-16
(093)581-5085